

1. 上興部附近の開拓

伊藤 勇市郎

明治28年4月7日生 宮城県出身。
明治42年1月20日上興部に入地。

市街地域の開拓

私が父勇作と入殖したのは、上興部神社附近で、その頃は勿論市街の形もなく、大きな赤ダモの木が沢山生い茂っている原野でした。地主は田所新蔵で、私たちと前後して入殖した人たちは、殆どが小作で、機敏な人たちが、大面積の未開地を払い下げていて、私たちには、払下げを受ける土地はなかったのです。

現在の上興部市街を最初に開拓したのは、明治40年から、福岡県人の飯田幸一と言う人で、私の地続きから消防会館附近にかけて開墾しておりました。続いて駅の裏側から石灰工場入口にかけて、後藤大五郎、千葉安次郎が、42年から私たちと千葉元治が、神社附近から小学校附近を開墾したのです。

その後、菅原清左衛門、佐々木清造、工藤勇作が相次いで入地して、現市街附近が、次第に畑になっていきました。

旧市街では、小林四郎左衛門が、店と宿屋をやっていましたが、店などは満足な品物がなく、わらじが菓子箱のなかに入れてあったり、小物が僅か並べられているだけでした。

私たちより1年くらい早く、本間周吉（子、千代多）、村井丑之丞が入地しており、これらも商店を営んでいて、本間さんは、店の傍ら22線沢入口附近を開墾しており、そのため後に、22線沢を本間の沢と言われるようになりました。

また上興橋を渡った処に能登の人で、館岡与三松が宿屋をしており、後に水車で精麦、精粉や、澱粉工場をやりました。

奥興部入口（現角力山太一附近）に吉江音平と言う人が入殖していましたが、平林捨松（北川星数附近）さんと共に、あの附近では最も古い入殖者でした。

41年から42年にかけて、石丸滝蔵の小作に、菊地兵三郎、千葉新助、加藤金助等が、田所の小作に西村源太郎が入殖しまして、上興部周辺が開拓されていったのです。

札滑の入口で、宇佐見国一が商店をやっており、東興会館の上手に、米田が駅逓を営み、その附近を小作を入れて開墾していました。

テッペ齊藤と言った齊藤元治は、最も古い開拓者の一人です。

教育所の開校

私が上興部に入殖したときは、上興部第二教育所は開校前だったが、校舎は建築されていて、初代の教員になった小林吉次さんが、開校の年（明治42年）3月ころ、入殖者の家を一軒ごとに、就学児童を調べて、内地で受けた学業程度によって、学年編入を定めていました。

小林吉次さんは、上川中学（後の旭川中学校）の二年中退だったそうです。

上興部第二教育所の開校の功労者は、今は誰であるか知られていませんが、当時第一の功労者は、米田駅逓の管理人をしていた川村留吉さんでした。

川村さんは、札滑入口に土地も所有しており、米田久三郎の娘と結婚して居りました。

川村さんは、教育所建設に多額の寄附をしたので、建物も当時としては珍しい土台付で、屋根は桎葺き、板壁の校舎で、その年、上興部より2カ月程早く開校した、七重の教育所と比べると数段立派なものでした。

現在上興部神社に奉納されている、大正2年ころの学校と神社の写真がありますが、

神社といっても木柱に、天照皇太神宮と墨書したもので、あの立派な字も、川村さんが書いたものです。

開校50年記念式でも、最大の功労者だった川村さんのことを知る者もなく、忘れ去られて行くことは、淋しい限りです。

火除けの腰巻

私が入殖したときは、西興部地域は、山火事を知らない密林地帯でした。山はもとより平地まで、空も見えないほど大木が生い茂り、下草は僅かで、小柴も殆どなくて、大木のまばらな所は、熊笹が密生していました。

明治時代の幼稚な測量技術で、割に正確な殖民地の区画割ができたのも、現在よりも山野の見通しが良かったためでしょう。

現在の山火二次林になった原因の大山火は、私が入殖した明治42年と、44年に発生したのが大きく、その後毎年のように山火事が発生して、村内の美林を焼きつくしており、山火事の発生が無かったなら、今のような人口の過疎も、こんなには進まなかったでしょう。

明治42年は、雄武戸長役場から、興部戸長役場が分離した年ですが、この年の山火事は、シカリベツ（一ノ橋）の国境を超えて、飛火しながら上興部原野を越え、興部原野に達し、開庁したばかりの興部戸長役場をはじめ、興部市街70戸以上を焼失しました。

明治44年の山火事も、矢張り国境から燃え広がったものです。

この2回の山火事は物凄いもので、松の密林に火が入ると、真黒な煙と炎が何10尺も立ち昇り、強風に煽ふられて、峯から峯に飛火し、アッという間に燃え広がって行くのです。

内地から移住したばかりの入殖者は、火を消す方法を知らず、生まれて初めて見る凄まじい山火事に慌てふためき、僅かばかりの家財道具を土に埋めて、女子供は川ぶちに避難し、男たちは家に残って、開拓小屋を守ったのです。

このとき、誰が初めたともなく、一、二の屋根に、棒にしばりつけた赤旗が立ちはじめ、忽ち全戸に立つようになりました。これは女の人の赤い腰巻で、腰巻は不浄のものだから火除けになると言うことで、使った古いものほどご利益があると言うことでした。

44年の山火事は特に物凄く、地獄とはこんなものかと恐れ戦き、立ち込める煙に眼を痛めた者は、川水で眼を洗い、夜は燈火がいらぬ程燃え続け、日蓮宗の信者は、必死に太鼓を叩いて、鎮火を祈っていました。

山際の畑に掘り残した馬鈴薯が、山火事の熱で、掘ってそのまま食べれる程焼けたという話も伝わっています。

この年は、全道的に山火事が発生し、皇室から日根侍従が、土産子馬にまたがって山火視察に見え、また石原北海道長官も視察に来て、米田駅通に一泊しています。

とに角、その後も何度となく山火事にあいましたが、あんな恐い思いをしたのは、初めてで終りです。

あの時の赤い腰巻のお蔭でしょうか、興部の方は民家が焼けて大火災になりましたが、村内には焼けた家がなく、今でも不思議に思っております。